

インド環境研修 報告書

2018



はじめに

本報告書は、2018年3月13日から21日までの10日間、インド共和国の都市・農村環境を訪問して人々の暮らしの実情や地域環境問題の実態、国際環境協力の現場を視察した「インド環境研修2018」の報告書として作成されたものです。本報告書は、この研修に参加した環境科学科学生4名の研修生によって作成され、この研修でどのようなことを体験し、どのようなことを感じ、学びを得てきたのかを、特定テーマに基づきレポートとしてまとめています。

本現地研修では、前半に観光地として有名な首都デリーやタージマハルを訪ね、都市の生活環境や歴史文化を学びました。そして後半は、インド共和国東部のオディッサ州に移動し、環境活動をキーワードに、違法な狩猟から生計手段を代えて成功したエコツーリズムの視察や自然災害で家財を失った住民向けの災害支援復興支援住宅で暮らす住民との対話、ベンガル湾沿岸部の気候変動リスクに対するコミュニティの強靭性を高めるための環境活動や住民の暮らしの実情などを視察しました。

本研修の狙いは、福岡女子大学学生の国際活動に関する興味の深まり、意識の向上、および自発的な活動の実践を通じて、地域・国際の両レベルから環境問題への理解（グローバル環境問題）および問題解決にアプローチできる人材を養成することにあります。10日間という短い間で、環境にかかわる事象や問題の「リアリティ」を把握することは難しいですが、事前学習で設定したテーマに基づき現地でリサーチを行うことによって、複雑な現象から問題を切り取り、調べ、情報を発信するといったフィールドワークの面白さを体験できたと思います。

この研修にあたっては、全日程を通して案内していただいた、カウンターパートのパリシュリ (PALLISHREE) のバプゥさん、事務局長のD.P.ダスさん、その他スタッフの方々に多大なるお世話をしていただきました。また、本研修は、平成29年度に採択された福岡女子大学研究奨励交付金(A)「グローバル環境問題理解のための学生による自発的なアクション・リサーチの推進」(代表：岩崎慎平)の支援を受けて実施できました。最後に、この場をお借りして、研修に関係してくださった皆様に深く感謝を申し上げます。

2018年6月

担当教員 岩崎慎平

スケジュール

3/13

- ・デリー到着

3/14

- ・アグラにてタージマハルおよびヤムナ川見学
- ・ニューデリーにてインド門見学
- ・デリーからブバネシュワールへ移動

3/15

- ・海洋博物館見学
- ・ハンドクラフトの訪問

3/16

- ・チリカ湖モンゴラジョディのエコツーリズム視察
- ・魚市場視察

3/17

- ・災害復興支援集合住宅視察
- ・学校訪問
- ・漁村視察
- ・村住民を対象としたヒアリング調査

3/18

- ・学校訪問（2箇所）
- ・SHG(セルフヘルプグループ)活動視察

3/19

- ・チリカ湖サトボダのエコツーリズム視察
- ・チリカ湖ビジターセンター訪問
- ・マーケットでの買い物

3/20

- ・インド料理体験
- ・ブバネシュワールからデリーへ移動

3/21

- ・帰国



インド門



エコツーリズム体験



女子生徒による環境活動説明の様子



漁村住民とのヒアリングの様子



民族衣装を来て記念撮影

基本情報

インド

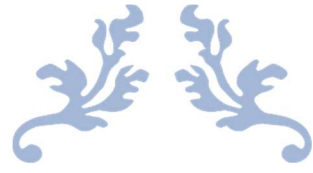
- 正式名称 インド共和国 Republic of India
 - 首都 ニューデリー
 - 人口 13億2680万人(2016)
 - 面積 328万7,469km²
 - 民族 インド・アーリヤ族、ドラビダ族、モンゴロイド族、その他
 - 宗教 ヒンドゥー教79.8% イスラム教徒14.2% キリスト教徒2.3% その他
 - 言語 公用語 ヒンディー語、準公用語 英語
- 29の州と7の連邦直轄領に分かれており、各州で話される言語が22存在する。
- 通貨 ルピー (1ルピー=1.64円) ※2018/06/05現在
 - 日本との時差 -3時間30分
 - 気候 乾季(10~3月) 暑季(4~6月) 雨季(7~9月)の3つに分けられる。
また、広大な国土を持つため、都市ごとに気候は異なる。

ブバネシュワール

人口約83万人のオリッサ州の州都で市内には100以上のヒンドゥー教寺院が点在する。年間平均気温は27.4度で、今回の研修で訪れた3月の平均気温は34.9度である。情報技術産業や観光業がさかんである。

チリカ湖

インド東岸オディッサ州ベンガル湾沿いに位置し、国内最大の汽水湖(海水と淡水が混じり合った塩分の少ない水からなる湖)である。面積は1,055km²で平均水深約2mと浅めである。チリカ湖にはイラワジイルカをはじめ希少な野生動植物種が生息し、生物多様性が豊かな地として知られている。渡り鳥においては、年間100万羽以上が越冬することから、1981年にインドで初めてラムサール条約登録湿地に指定され、渡り鳥や水鳥の生息地として保全が義務づけられている。しかし1980年代以降、上流部の森林伐採による土砂の流入が原因で湖口が塞がれ、淡水化や漁獲量の減少、漁師の貧困などの問題が発生した。そうした中、2000年に政府は新たな湖口を開削したことにより、生物多様性および生物生産性が劇的に回復した。以後、チリカ湖は湿地再生の成功事例として国際的に広く知られている。



リサーチ・レポート



私たちは、チリカ湖でバードウォッチングをするエコツーリズムに参加し、主催者に話を伺った。

これまで、この地域では、禁止とされているポーチングや乱獲で生計を立てる人も多く、逮捕される人もいた。そこで、ある NGO が、鳥の捕獲の禁止と環境保全を地域住民に呼びかけを行い、1988年、このコミュニティでは、鳥の捕獲をしないことで合意した。インド政府は、この取り組みを評価し、同年、エコツーリズムが始まった。エコツーリズムの立ち上げには、政府が協力しており、政府はその他にも、宣伝活動を行ったり、環境教育の一環で学校の児童らを招待したりしている。5年前には、あまり人が来ていなかったが、今は鳥が多く見られる冬に合わせて、約1万人の人々がバードウォッチングで現地を訪ねている。1万人の内訳は、2割がフランスやイングランド、南アフリカなどからの外国人、残りの8割がインド国内からの観光客であった。今では、取材した団体の他に、いくつかエコツーリズム事業体が創設されている。各事業体は、それぞれ独自のネットワークやホームページ、旅行代理店を利用して、宣伝活動を行い、顧客獲得の努力がなされていた。

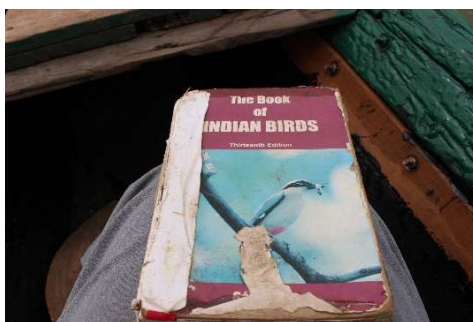
取材団体では、1回につき、約2時間かけてバードウォッチングを行い、値段は850ルピー(日本円で約1400円)である。この収入は、100ルピーが協会、50ルピーは望遠鏡やガイドブック、300ルピーはガイド、400ルピーはボートの所持者に支払われる。鳥の捕獲を行っていたころに比べると、収入は少ないようだが、経済的には満足しており、不満はないようだ。また、この地域では、150人がこのエコツーリズムに関わっており、その家族を含めると、500人に及び、これらの人々は、高い環境意識をもつと予測される。



エコツーリズムの事務所



バードウォッチングの様子



鳥のガイドブック

私は塾でアルバイトをしているため、インドの教育に興味を持ち、調査することに決めた。インドの教育制度は州によるが、日本とは異なり5・3・2・2制であり、5歳から初等学校に入学する。実際に村の子どもたちにインタビューを行った際、その地域でも5歳から学校に通うと言っていた。学校は、日本と同じ4月に始まる。教科については学校によって習う言語に違いがあったものの、英語、ヒンディー語、サンスクリット語、オリヤ語(写真)、数学、地理、歴史、理科を学習していた。インドでは、公用語であるヒンディー語の他に州によっては憲法で公認されている言語がある。ヒンディー語と自分の州の言語を使い分けるインド人は器用だと思った。学校では給食が支給され、制服は政府から支給されるという。インタビューをした地域では、ほとんどの子どもたちは放課後に塾で2~3時間学習していた。塾の中に案内されると日本でいう小学校低学年くらいの子どもたちが床に座って勉強していた。その塾では英語と数学の授業が行われており、テキストにはアルファベットの練習や足し算の筆算の練習などが載っていた。塾の先生は、19歳の女子大学生であった。インドに塾があること、幼いうちから熱心に勉強していること、大学生がアルバイトで講師をしていること、全てが予想外で驚いた。



オリヤ語(左)とヒンディー語(右)あること、幼いうちから熱心に勉強していること、大学生がアルバイトで講師をしていること、全てが予想外で驚いた。

パリシュリが活動している学校では、環境の授業も行われていた。環境の授業では、植樹や実験を行っているようで、2回の環境教育が終わると、生徒たちは自分たちが植えた植物の水やりは自分たちで行うようになっていた。しかし、水環境の乏しい地域では、井戸を掘っても塩分の混ざった水がでるため植物の水やりには適さない。そのため、1km離れたところまで水をもらいに行き運ばなければならないという課題があった。村の人々からも「きちんとした井戸を作ってほしい」と言われ、今回のインド環境研修を無駄にしてはならないと痛感した。また、ゴミに関しては学校にゴミ箱を設置してリサイクルできるものはコンポストを行っていた。しかし、プラスチックを埋めて廃棄するなどの問題もあった。パリシュリの活動している学校では、生徒たちが近くの水環境に生息する魚の標本などを作っていた。また、学校によっては植林クラブやエコクラブがあったり、「植樹の日」を設けていたり、訪れた学校は日本の学校と比べると実践的な環境教育が行われていると感じた。

インドの教育の見習うべき点、改善すべき点が見えた研修となった。

インドの食事

16 環境 019 古賀理紗子

インド現地で食べた食事は、日本のインド料理屋さんで食べて想像していた物とは少し違った。日本でインド料理といえばカレーと一緒にナンを食べることが主流であるが、滞在中は一度もナンを食べなかった。私たちが滞在したオディッサ州はインド東部に位置し、小麦も米も手に入れられるため、主食として小麦の加工品も米も出てきた。小麦の加工品はロティー（パンの総称）と呼ばれる。中でもチャパティー（全粒小麦粉を水でよく捏ねた物を延ばして棒で丸く延ばして、鉄板で焼いた無発酵のもの）は、昼・夕食に、プリー（チャパティーの生地を油で揚げる）は朝食に出てくることが多かった。チャパティーやプリーが全粒小麦粉が原料で無発酵であるのに対して、ナンは精製粉（マイダー）が原料で発酵をさせ、タンドール窯というもので焼くという大きな違いがある。ナンはインドでは贅沢品で、一般的ではないということが分かった。その他の小麦の加工品として、パーパド（煎餅）も出てきた。これは、家庭毎に異なるが、一般的にはレンズマメ、ヒヨコマメ、ケツルアズキまたは米粉から作られる。生地は薄いトルティーヤ状の円形にして、伝統的には天日で干す。その後好みに応じてかりっと揚げたり、直火にかけたり、トースターで焼いたり、電子レンジで温めて食べるそうだ。料理の付け合わせとして出てくることが多かった。日本でおなじみのラッシー（Lassi）も飲んだ。ラッシーはヨーグルトをベースに、水、砂糖、塩、牛乳などを入れて作るヨーグルト飲料であるが、インドのプレーンラッシーは、シンプルで酸味が強かった。インドでの料理の提供の仕方としてターリー（ミールス）と呼ばれる丸い大きな金属のトレイにカトゥリ（ワーティー）と呼ばれる小さなステンレスのお椀をいくつかのせるものがある。ターリーの料理構成は地域によって異なるが、米（インディカ米）、ダル（豆カレー）、野菜料理、ロティ（パン）、パーパド（クラッカー）、カード（ヨーグルト）、ひとくち分のチャツネ（ソース）や漬物、そしてデザートといったメニューが一般的なターリーである。1つの大皿の上で手を使って料理を混ぜながら食べると味が混ざり美味しくなる。ターリーには「定食」という意味もある。米やロティは大皿の中心に配置され主食となる。ダルは、日本人にとっての味噌汁のようなもので、豆をスパイスと一緒に煮込んだものである。加える水の量によって濃さはルー状からスープ状まで色々である。汁気のない野菜料理は普通一種類の野菜でひとつの料理をつくられる。（ベジ）じゃがいも、カリフラワー、なす、オクラ、ピーマン、マッシュルームなどが具材として出てきた。チャトゥニー（チャツネ）は舐め物、サブのおかず、ソース、またはペースト状の調味料のことであり。豆と各種香辛料で作る日本のふりかけに類似する。エビやマトンの料理も出てきたが、野菜の料理は甘く日本人の私たちにも食べやすかった。どのレストランでも同じ具材、切り方、盛り付け方のサラダが出てくるのが面白かった。丸いキュウリ（皮なし）、にんじん、紫タマネギ、トマトを重ねた上に、ライムが置いてあり、塩こしょうとライムを搾って食べた。他の料理がオイリーであったりするので、このシンプルな味付けのサラダが丁度よかった。案内して

くれたバップーさんの家で頂いたサラダは、ライタと呼ばれる物で、細かく刻んだ野菜やフルーツをヨーグルト、スパイスで和えた物であった。インド料理の特徴は香辛料（スパイス）をふんだんに使うことだ。マサラ（乾燥させた香辛料の総称、混合スパイス）を各家庭、レストランで料理ごとに用意するそうだ。主なスパイスとしてはトウガラシ、クミン、コリアンダー、マスタード、カルダモン、シナモン、サフランなどが挙げられる。食後にはフェネル（ソーフ）が用意されてあるレストランもあった。これは緑色の粉で、食後に消化を助け、口をさわやかにしてくれる効果があるが、癖が強くインド人でも苦手な人がいるほどで氷砂糖と一緒に一口食べるらしい。インドでは、ベジタリアンも多くスーパーなどで売られている食材に緑色と赤の●マークでベジマーク、ノン・ベジマークを区別していた。きれいで美味しいレストランを見つけるコツとしては、暗い店を選ぶことだと教えてもらった。食事の時間帯も少し変わっていて朝食：午前7時～8時、昼食：午後2時～午後3時、夕食：午後9時～10時が一般的であるらしい。昼が一番ボリュームで、夜になってもお腹をすかないこともあった。



1.はじめに

古代インドでは、ヴァルナと呼ばれる社会的身分を定めたカースト制度やジャーティと呼ばれる職業区分制度が存在し、今なお現代のインドに根強く残っている。また、ヒンドゥー教の聖典であるマヌ法典では女性に対する差別的な記述が含まれており、インドでは男女が担うべき役割が明確に分かれている。今回の研修で、ブバネシュワールの集落に住む女性に服装や装飾品について聞き取り調査を行い、インドにおけるジェンダーについて理解を深めた。その結果、女性の服装や装飾品は結婚と深い関係があることが分かった。

2.調査

インドを訪れてみると、サリーを着た女性や眉間や髪分け目に赤い塗料を付けている女性をとて多く目にした。そこで、ブバネシュワールの集落に住む女性たちに、サリーや額や眉間に塗られた塗料の意味について聞き取り調査を行った。



インタビューの様子

まず、サリーと呼ばれるインドの民族衣装についてである。サリーは一枚の布を体に巻き付けるようにして着る衣装で、シルクやコットン生地で作られており、様々なデザインと豊富なカラーがあるのが特徴である。このサリーは、結婚した女性が着る衣装であることがインタビュー調査で判明した。結婚式においては、サリーがウェディングドレスと同じ役割を担っている。未婚の女性はジーンズにクルティを着るなど、洋装化も進んでいる。次に、シンドゥールと呼ばれる赤い印についてである。これを付けるのも結婚した女性のための慣習である。他にも、結婚している女性は赤いバンダラや足に指輪を付けるといった、外見で結婚しているかどうか判断できる。このように、伝統的なインドの女性らしい装いをするのが、既婚女性には求められているのである。



シンドゥール

3 さいごに

今回の調査でインド人女性の服装や装飾品が結婚と大きく関係している事が分かった。日本とは全く異なる文化であり、それを理解する事にも繋がった。インド研修で、現地の女性に直接話を聞くことができた事は自分自身にとっても大変貴重な経験であり、勉強になった。